Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-09-16

鶴甲の子ども

島並, 良

(Citation)
凌霜,389:27-29

(Issue Date)
2011-05

(Resource Type)
article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002615

学園の窓

「鶴甲（つるかぶと）の子ども」

法学研究科教授　島　並　良

私は、鶴甲幼稚園と鶴甲小学校を卒園・卒業した。本冊子読者の皆さまはご存知のとおり、鶴甲は法学部などがある神戸大学六甲台第1キャンパスの東と北に位置し、市バス36系統の終点となる鶴甲団地を中心とした住宅街である。もともとこの地には鶴甲山と呼ばれる六甲山の支峰があったが、山1つ分の土が丸ごとベルトコンベアーで海岸に運ばれ、現在神戸製鋼所がある灘浜東町と、その東の御影浜町・住吉浜町という2つの埋立て「島」が誕生した。他方で土を除いた跡地には、昭和43年に鶴甲の町が新しく造成されたが、それと同時に、神戸大学の教養学部（現・国際文化学部）が鶴甲1丁目に、教育学部（現・発達科学部）が鶴甲3丁目に移転し、それらに挟まれた鶴甲2丁目に幼稚園と小学校も新設されたのである。

鶴甲小学校の西に隣接するマンションの4階で、穏やかな大阪湾とカラフルな神戸の街並み、そして神戸大学を毎日眺めながら、私は3歳から13歳までの約10年間を過ごした。ベランダの真下には、市バス16系統が走る県道95号（灘三田線）を挟み、神大教養学部を見下ろすことができた。住み始めた当初、学生会館から教養学部北側にかけて県道沿いに広がる斜面は、まばらに雑草が生えるのみで、ほとんどが剥き出しの茶色い地肌だったが、やがて風に乗って運ばれたマツなどが自然に根付き、今ではちょっとした林のような景色が広がっている。かつての鶴甲山ほどではないのだろうが、自然の自己回復力は素晴らしい。

1970年代の鶴甲の子どもたちにとって、神戸大学の六甲台第1キャンパスは格好の遊び場だった。鶴甲の新しい2キャンパスとは異なり、すでに昭和初期に神戸商大が置かれていた構内には、子

どもの目から見ても手入れの行き届いていない藪地や、子どもの目から見ればお化け屋敷のような木造建築を、随所に見ることができた。私たち近所の子どもは、不法に学内への「建造物侵入」を繰り返しては、競って虫採りと探検に励んだのである（今は学内で遊ぶ小学生の姿を全く見かけないが、一体どこへ消えたのだろう）。少し年かさになると、図書館北側のグラウンドの一角で、運動部員がいない時間帯を見計らい、少年野球に明け暮れた。また、神大児童文化研究会が鶴甲北公園で毎週土曜日午後に開いていた子供会では、「しごき班」（今考えるとなぜこんな不思議な名称だったのか）に属して、神大生のお兄さん、お姉さんに遊んで貰ったりもした。10歳で父を亡くした折、子供会のお姉さんに頂いたお手紙は、思い出の品を溜め込んだスチール缶の中に今でも大切に仕舞われている（岩間さん、お元気ですか？）。

◇

大学受験浪人も含めた19歳までを灘区で過ごしたあと、10年間の東京・海外生活を経て、ちょうど30歳で神戸大学法学部に教員として赴任した。故郷に舞い戻ってまず感じたのは、懐かしいあの神大キャンパスの異変である。単に木々の背丈が伸び、新しい建物が増え、そして子ども達の姿が消えたというだけではない。変わらないはずの情景についても、少年の目にはあれだけ巨大に映った白亜の本館、そして広大に思えたグラウンドや道幅が、驚くほど狭小に感じられた。

そしてもう1つ、着任当時の私が感じた「異変」は、神大生がとても若く、さらに有り体に言うと、何とも幼く見えたという点である。少年から見た大学生のお兄さんとお姉さんは、野太く声変わりのした、あるいはきれいにお化粧をした、立派なオトナであった。もちろん、声変わりや化粧は今の学生も変わらないのだが、張り切る新米教師の私がまず感じたのは、学生たちの頼りなさ、線の細さだった。子供会でお世話になった神大生は、もっと自分の意見をしっかり持っていたし、少々のことでは動じなかったはずだ！…というのは、しかしまあ、今思えばきっと幻想なのだろう。建物やグラウンドの大きさは変わらず、ただ自分の身長が伸びただけであるのと同じように、神大生の内面はいつの時代も変わらず、単に自分が年を重ね繊細さを失っただけに違いない。若かりし頃の自分自身を過大評価し、今時の若者はと繰り言を零すのは古代エジプトにも見られる倣いだというから、ましてや30数年前の少年時代に仰ぎ見た大学生の朧気な記憶と比べられては、今の学生達が気の毒というものであろう。

私が専門とする知的財産法は、民法などの基本科目と比べると産業政策・文化政策に左右される度合いが強いため、現在の制度運用（解釈論）と並んで、それを支える政策立案（立法論）を学び理解する必要性が高い。そこで平成22年度後期に、私は通常の知財法の講義とは別に、経済学部の先生にもご同席頂きながら、社会分析基礎演習「法と経済学」を実施した。具体的には、学部2年生を対象に、本場米国のロースクールで一番よく使われているシャベル教授（ハーバード大学）のテキストを参照しつつ、法制度の背後にある

政策の合理性とその制度化のあり方について、全員で討議するという内容であった。当初、経済学的な用語と思考方法に戸惑いを見せていた学生達も、1学期を経るうちに見違えるように成長した。私は、この数年の間に研究・教育の両面で進行する本学経済学部との協働を心強く感じると同時に、教師も唸るような自分の意見を持ち、それを的確に表現する学生達の頼もしい姿に、30年前のオトナだったお兄さんとお姉さんの記憶を重ねていた。

◇

私が鶴甲の子どもになってから、40年近くになる。その間、かつての新興住宅地・鶴甲では住民の高齢化が進み、小学校の生徒数も最盛時から半減したと聞く。他方で、いま私が住む六甲道駅の南では、大震災後の再開発で誕生したマンション群のために若年人口が急増し、最寄りの小学校はグラウンドの仮設校舎で対応しているようだ。このような人口動態を受け、40年前には鶴甲の子どもだけで定員を充たしていた鶴甲幼稚園も、今では園バス3台を近隣区町に2回転ずつさせて園児を集めている。

六甲道界隈でも、鶴と甲のマークだけはあの頃と同じリュックを背負い、小振りな黄色いバスへと毎朝元気に乗り込む園児たちがいる。そんな新しい「鶴甲の子ども」の一人を、バス停ママ友と一緒に手を振って送り出すのが、出勤前の私に時おり割り振られる、我が家でのささやかな役割である。